

# 『社会史的視点』から語る 新時代の中国文学史

秋吉 収

魯迅を始め数多くの研究蓄積を有する著者の藤井氏には、文学史に関する専著だけでもすでに『中国文学この百年』（一九九一、新潮社）、『新しい中国文学史』（一九九七、ミネルヴァ書房）、『台湾文学この百年』（一九九八、東方書店）、『中国映画百年を描く、百年を読む』（二〇〇二、岩波書店）、『20世紀の中国文学』（二〇〇五、放送大学教育振興会）などがある。また、魯迅新訳のみならず、鄭義や莫言などの現代作家、台湾の李昂や香港作品に至るまで多くの翻訳出版の実績があることも忘れてはなるまい。本書は、そうした準備を経た上でまさに満を持して上梓された最新の中国近現代文学史である。

中国文学史を最初に書いたのが、実は日本人であった（古城貞吉『支那文学史』

一八九六）ことは興味深い現象だが、文学史の記述に初めて本格的な「現代」部分を設けたのは、倉石武四郎編『中国文学史』（一九五六、中央公論社）であった（執筆は東大中文の石川忠久、岩崎富久男、尾上兼英、竹田晃、橋本萬太郎、丸山昇【倉石曰く「六君子」】）。丸山の手になる現代部分は、王瑤著『中国新文学史稿』（一九五一【上】開明書店、一九五三【下】新文芸出版社）の骨格を成す革命文学史論の記述に沿ったものであったが、その枠組は基本的にその後の日本における中国現代文学史執筆へ一貫して踏襲されていくことになる。藤井氏による全く新しい文学史は文字通り時代を画する意義を有している。

中国でも一九八〇年代から現在まで、

藤井省三著  
中国語圏文学史



A5判 256頁  
東京大学出版会 [2940円]

『毛沢東理論』からの脱却と『世界文学』への参入を企図した、『重写文学史』『二十世紀文学史』『百年文学史』『民国・共和国文学史』などの議論が盛んに行われてきた。北京大学を中心とする文学史研究者を糾合した嚴家炎主編『二十世紀中国文学史（全三冊）』（二〇一〇、高等教育出版社）はその代表的な成果である。政治的文脈や現代文学の時期区分、地域区分などは根本的に見直され、従来の『經典』作家に加えて通俗文学も積極的に取り込まれるなど斬新なものとなっているが、藤井氏の仕事もそうした流れに共鳴するものと言えるだろう。

『中国語圏』を冠した文学史は管見の

限り見当たらない。日本では、工藤貴正著『中国語圏における厨川白村現象』（二〇一〇、思文閣出版）など用例も散見されるが、中国ではその謂い自体が微妙な語感を含むせいもあってか採用されないようだ。中国大陸に加えて台湾や香港、馬華（マレーシア・シンガポール）文学などを収録すると同時に、中国では決して取り上げられることのない亡命作家鄭義（アメリカ在住）やノーベル賞作家高行健（フランス国籍）を含めることを意図したものとも読めようか。

「詩」がほとんど登場しないなど、その取捨選択については議論もあるのが、借りものではなく自身の研究のみで織り成された希有な通史である。本書の構成は次の通り（節、細目は省略）。

## 序章

中国語圏の現代文学を学ぼう

第1章 清末民初（一九世紀末―一九一〇年代半ば）——租界都市上海の誕生と「帝都」東京体験  
第2章 五・四時期（一九一〇年代後半―

二〇年代後半）——「文化城」北京と文学革命

第3章 狂熱の三〇年代（一九二八―三七七）——国民革命のオールド上海

第4章 成熟と革新の四〇年代（一九三七―四九年）——日中戦争と国共内戦

第5章 暗黒の毛沢東時代（一九四九―七九年）——文化大革命に至るまで

第6章 鄧小平時代とその後（一九八〇年―現在）——天安門事件と高度経済成長

第7章 香港文学史概説  
第8章 台湾文学史概説  
参考文献・図版出典一覧  
作家名索引

本書を通して改めて強く感じさせられるのは、中国文学におけるその余りにも濃厚な政治性である。「北伐に呼応して」創造社は「芸術のための芸術」をあつさ

りと「革命のための文学」に替えている。郭沫若、郁達夫、成仿吾らは広州の国民政府に参加、（中略）茅盾も商務印書館を辞職して広州へ武漢へと赴き、軍事政治学校の政治教官、新聞社主筆を務めている。魯迅もまた張作霖軍閥の弾圧を避けて、北京より廈門経由で広州に行き中山大学教授に就任した。文学者が革命の先頭に立つて宣伝啓蒙を担い、知識階級を率いたのである。国民革命の際に現れたこの現象は、その後も抗日戦争期の救国運動、人民共和国建国期の革命運動、そして八〇年代から現代に至る民主化運動においても繰り返される」（六八頁）。

政治経済と強く関わる中国語圏文学を紐解く方途として、著者は「社会史的視点」を採用する。高杉晋作の降り立った租界都市上海の状況、中国と日本における鉄道や通信網の整備、近代教育普及の実際、読書市場の形成など、文学の背景たる社会学、歴史学的な考察・検証は、人口から営業キロ数、発行部数に至るま

ですべて具体的な数値で示され精緻を極める。時に、肝心の文学が置き去りにされたかの感すらあるが、結果として強い説得力を有するものとなっている。

政治という点で言えば、著者の毛沢東、中国共産党に対する批判は徹底している。「共産党軍は劣悪な条件下で日本軍とよく闘い、抗日戦争に勝利した時点では、人口九〇〇〇万を越える地域を解放区として支配していた。この解放区の中心が陝西省北部の小都市延安である。(中略)毛沢東は妻の賀子珍と強引に離婚して上海女優の江青と再婚した。食糧、住宅などからセックスに至るまで、党幹部は特権を享受しており、(中略)知識人は中共の官僚主義体制や幹部の特権に対して批判を始めるものの、大量に粛清されてしまった」(二〇〇頁)。「劉賓雁の報告文学『人妖の間』は作品発表の年の四月に摘発された黒竜江省の県支部書記の汚職贈収賄事件を描いたもの。『党幹部はあちらこちらに気を遣うが、人民共和国の主人である人民に対してだけは気を

遣わない』『共産党は一切を管理する。ただし共産党だけは管理しない』という警句は、当時としては破天荒のものだった」(二二九頁)。「左翼文学が猛威を振るう上海」(八四頁)、「(香港の)中国への返還という悪夢」(一七二頁)等々、こうした嫌悪感は一編に漲っている。各章末に配された映画短評「コラム」においても、『紅高粱』(一九八七)『紅夢』(一九九二)『活きる』(一九九四)などで国家の論理に果敢に挑戦した張芸謀が、北京オリンピック開幕式総監督を務めるまでに変節する足跡(六四頁)、反右派闘争によって右派分子が送り込まれた労働改造という名の強制収容所の実態(三〇〇〇人の収容者のうち生還したのは四〇〇名のみ。食人も行われていたという)を描いた映画『無言歌』の紹介(二二四頁)など、政治に翻弄される文学者(芸術家)を描く筆には鬼気迫るものがある。あたかも鄭義や莫言の魂が乗り移ったかのようだ。

『鲁迅——東アジアを生きる文学』(二〇一一、岩波新書)を上梓したばかりの

著者の鲁迅に関する記述にも無論抜かりはない。「棄医従文」の契機となった「幻灯事件」が実際は「『電影』事件」であること(九頁)、代表作「狂人日記」(一九一八)の舞台設定や人称表現による再評価(四七頁)等々、最新の研究成果が披瀝される。職業選択に見る漱石との比較(二八頁)等も興味深い。だが、『鲁迅と姦通罪』というショッキングなタイトルの一節は読者の度肝を抜く。「彼(鲁迅)は妻を北京の母のもとに置き、一七歳年下の教え子許広平と上海で同棲していたため、国民党系のメディアにスキャンダルとして叩かれている。ちなみに一九三五年に公布された中華民国刑法第一七章婚姻および家庭妨害の罪第二三九条には、「配偶者がありながら他人と姦通した場合是一年以下の実刑に処する。姦通の相手も同罪。」と規定されており鲁迅も許とともに犯罪者となりうるのであった」(八七頁)。私人の鲁迅に対して何とも手厳しいが、たとえ鲁迅であっても文学史の一部に過ぎぬという、個々の作家

作品に向き合う著者の真摯な態度と歯に衣着せぬ特徴がよく表れている。

各章すべてに、中国（語圏）に関わった日本人が登場することも特筆される。

南京汪精衛政権下で中国人高官の家族に日本語教育を施しつつ張愛玲など同時代中国文学を数多く翻訳し、戦後は留用されて日中交流に尽力したという室伏クラ（二〇六頁）などが歴史の闇から甦る。

その他にも芥川龍之介、金子光晴、大宅壮一、大江健三郎、村上春樹……と、

興味は尽きない。だが、「この三都（重慶、桂林、昆明）に対し日本軍は「士気の征服」を目指し、航空機による無差別爆撃を行っている。たとえば重慶の場合一九三八年二月から四三年八月までの五年間、爆撃は二〇〇次を越え、空襲による直接の死者だけでも一万一八八五人に上る。（中略）日本軍が生み出した戦略爆撃の残虐さ、犯罪性を現地に目撃し記録し告発し続けたのが、上海・北京から移動してきた文学者であり新聞・雑誌であった」（一九八頁）。「日本人の書く」中

国近現代文学であることの意味を著者は常に問うている。だが、竹内好や伊藤虎丸、丸山昇らの中国研究に対する認識とは異なるものであろう。中国語圏を生きた人々の注視の下、私たちは研究の「自由」を如何に獲得すべきなのだろうか。

戦争と文学ということで言えば、著者の持論たる「台湾における日本語によるナショナリズムの形成」には少々疑問を感じた。「想像の」とは言え、強制された言語に対して「公共圏の創出」以上の意味を果たして付与できるものだろうか。市民権の獲得には到底達しなくとも、頼和のような抵抗にこそナショナリズムの萌芽を認め得るのではないか。中国語圏における外国語（或いは少数民族語）という観点からも考えてみたい気がする。

台湾、香港を含め、「現代（当代）」文学の紹介解説も多くの作品を引きながら非常に詳しいものとなっている。市場経済化に伴い多様化した社会はどう描かれ、民主化運動への政府の弾圧に文壇はどう立ち向かったのか。可能な限りすべ

ての作家達に対する著者の直接取材と徹底的な調査によつて得られた膨大な知見・資料を駆使して、隠されていた真実も白日の下に晒され、克明に記される。

知識人達の深い苦悩や過酷な生き様は、読む者を啓発し鼓舞して止まない。著者の魅了された中国語圏文学の世界に、覚えず読者も引き込まれていくことだろう。

高行健の短編集『母』（二〇〇五、集英社）の訳者飯塚容氏によれば、日本へ紹介して欲しい作品として彼が挙げたものはすべて歴史的、社会的背景をあまり含まない作品ばかりであったという。中国の作家達が「中国」によつてでなく純然たる芸術作品として理解されたいと切望するのは当然であろう。彼らは政治を語る「必要のない」時代の到来を、今か今かと心待ちにしているのだ。

（あきよし・しゅう 九州大学）

